知的障がいのある児童生徒の、各教科や各教科等を合わせた指導における授業づくり

福島県立石川支援学校　教諭　田中真由美

１　はじめに

私は令和２年度・３年度の二年間、学校教育指導委員（知的障がい）として改善目標を設定し、主に本校の学校研究を通して実践を行ってきました。私は研修主任も担当しているため、学校としてのチーム力を高めることで教員の授業力を向上させ、児童生徒が何を学び何が身に付いたのかが分かる授業づくりを目指し、学校研究を推進してきました。学校教育指導委員として中学校等の学校訪問に同行し、授業を参観し指導助言も行いました。その中で、知的障がいのある生徒たちの学びを促すための手立ての在り方や、学びを積み重ね般化させていく難しさなどについて、授業担当者と協議を行いました。

学習指導要領が新しくなり、育成を目指す３つの資質・能力が整理され、授業改善の３つの視点が示されました。学びが断片的になりがちな知的障がいのある児童生徒たちが、より良い学びを積み重ねられるよう取り組んできた実践について、本校の学校研究の取組を中心に報告します。

２　実践

（１）研究授業の実施

①第一期（５～１０月）

学部ごとに３～５人の小グループに分かれ、本校独自に作成した「授業づくりシート」を使って一人一回の研究授業を実施しました。「授業づくりシート」は、目標や評価規準、３つの授業改善の視点における手立ての設定から指導計画の作成、単元・題材終了時の評価まで、学習指導要領に沿って検討、作成できるものです。併せて個別の指導計画や自立活動の流れ図を用いることで、児童生徒の実態や自立活動における中心的課題も押さえながら授業づくりを進められるようにしました。一人一人がこのシートを用いて研究授業を実施したことで、根拠のある児童生徒の具体的な学びの姿を引き出せたとともに、次の学びの段階へつなぐことができました。

②第二期（１１～１２月）

学部ごとに代表者の授業について学習指導案の細案を用いて研究授業を実施しました。特に目標と評価規準についてグループで協議を行い、児童生徒が何を学び何が身に付いたのかを明確にした授業を行えるようにしました。第二期の研究授業は公開とし、外部参加者からも意見をいただきながら児童生徒の学びについて複数で協議を行うことで、児童生徒の評価を客観的に捉えられたとともに、手立ての効果や改善についても検討することができ、教員の授業力を向上させることができました。

（２）外部講師の招聘

９月、１２月の二回、外部講師より指導助言を頂く機会を設定しました。講師は、二回を通して十文字学園女子大学教授の中西郁氏、１２月はさらに特別支援教育センターの二名の指導主事に御指導いただきました。９月は校内のみの研究授業でしたが、１２月は公開授業とし約２０名の外部参加者を迎え、事後研究会では活発な意見交換が行われました。外部講師からは、本校の学校研究の方向性や実際の授業について御指導、御助言をいただき、中西氏には３観点による評価規準の設定について御講演もいただきました。育成すべき資質・能力に基づいた目標を設定し、具体的な手立ての検討を行い、３つの観点に沿って評価をしていくことで、児童生徒の学びを広げるとともに確実に学びを積み重ねていけることを確認し、学習指導要領に基づいたＰＤＣＡサイクルの授業づくりの理解を進めることができました。

３　まとめ

授業づくりをする中で一番大切なことは自立活動も含めた実態を複数で客観的に把握することであり、その実態に応じて教材や教室などの環境をどう整えどう手立てを講じていけるかが重要であることを痛感してきました。また、教員一人一人がもつ力が発揮され、連携をとりながら授業を進められたときに生じる様々な効果についても目の当たりにしてきました。そのときの児童生徒の学びの姿から、「できて嬉しい」「分かることは楽しい」という思いが伝わってきました。

知的障がいのある児童生徒たちが確実に学びを積み重ねていくことは簡単ではありません。しかし、「学びたい」という思いを私たち教員は受け止め、導いていかなければなりません。これからも一教員として子どもたちの学びに寄り添い、確かな授業を展開できるよう学び続けるとともに、学校が一つのチームとして機能できるようその一員としての自覚をもって邁進して参ります。